

社会的カテゴリーとしての苗字

——「苗字アイデンティティ」に対する カテゴリー・サイズの効果——

土 肥 伊都子

<問題>

「日本苗字大辞典」(丹羽,1996)によると,日本人の苗字は291,129種類にも及ぶ。また,佐久間(1972)に準拠して推定された苗字総数は約十万種とされるが,日本人の人口の96%は,上位7,000位までの苗字のいずれかに該当するとされている(「日本の苗字七千傑」のHP)。そして,日本で最も多い苗字である「佐藤」の推定人口が約1,928,000人なのに対して,希少な苗字,たとえば第7,000位の「宮治」の推定人口は,約1,300人にすぎない。

苗字は固有名詞であり,個人を特定する役割を担うものであるが,上記の通り,多数のものが同じ苗字をもつこともあれば,少数のものだけがもつ場合もある。すなわち,苗字は個人が社会生活を営む上で必ず属する社会的カテゴリーの1つであるといえ,さらに各カテゴリーに含まれる人数,すなわちカテゴリー・サイズが大小様々なものと捉えることもできる。従来,社会心理学の領域で研究対象とされてきた代表的な社会的カテゴリーには,性別,世代,国籍,民族,職業,宗教などがあるが,苗字を社会的カテゴリーの一つととらえた研究は,筆者の調べた限りにおいて存在しない。しかしながら,苗字は全ての人が必ず所有し,日常生活で常に頻繁に使用され,客観的に容易に把握できるものであり,社会的自己の象徴という心理的な意味をもつことが予想される。したがって,社会的カテゴリーと関連する意識を実証的に研究するのに適した研究対象であるといえよう。

ところで,個人の苗字に対する意識は,その個人の苗字のカテゴリー・サイズの大小によって差異があると考えられる。たとえば,カテゴリー・サイズの小さ

い希少な苗字をもつ個人の場合、日頃は同姓の他者に出会うことも見聞きする機会も多くはないはずである。その代わり、偶然、同姓の人に出会ったり、スポーツ選手や政治家などで同姓の人がマスコミなどに登場したりすると、「私と同じ苗字の人だ」などと、その出会いの偶然性、同姓の他者に対する縁や親近感、自分との類似性などを強く感じると推測される。また、希少な苗字の夫婦同士や家族、親戚は、血縁関係や婚姻関係にあることへの意識が高いことも予想できる。反対に、カテゴリー・サイズの大きい、ありふれた苗字の人にとっては、自分の苗字への愛着心や同姓の者と出会うことに対する特別な感情などは、あまり強くはないであろう。自分と同じ苗字の他人と出会うことは特別なことではなく、いわば日常茶飯事だからである。本稿では、こうした自分の苗字に対する帰属意識や親近感、同姓の他者に対する同一視などを、「苗字アイデンティティ」としたい。これは、苗字に関連した社会的アイデンティティ (social identity; Tajfel & Turner, 1979) ということができる。社会的アイデンティティとは、自己概念のなかでも特に集団や社会的カテゴリーに所属することへの自覚に基づく自己イメージであり、これには通常、所属集団に対する評価や地位の高低と連合した、優越感や劣等感といった情緒的意味が付帯するものである (唐沢, 2005)。

社会的カテゴリー・サイズとそのカテゴリー内の成員の意識については、Mullen (1991) が、同じ社会的カテゴリーの集団成員同士は、特性や態度が同質であると認知する傾向にあり、これは多数派ではなくて少数派の成員に発生しやすいとした。ただし、こうした成員の同質性効果は、成員の数だけではなく、対象となる集団が判断者にとって内集団 (自己が所属する集団) であるか外集団 (自己が所属しない集団) であるかにも影響される。詳しくいえば、成員数の多少に関わらず、その集団が外集団である場合には、外集団同質性効果 (outgroup homogeneity effect) が生じることは、よく知られている。外集団の成員は内集団の成員より接触する機会に恵まれず、成員の特性に関する情報が乏しいため、少ない情報を無理に全ての成員に適用させようとするからである。これはステレオタイプの発生メカニズムの一つとして考えられてきたものである (Linville et al., 1989)。それに対して、対象となる集団が判断者にとって内集

団で、しかも少数派である場合に同質性効果が起きることを、Simon & Brown (1987) は、社会的アイデンティティ理論に依拠して指摘した。すなわち、カテゴリー・サイズが小さい集団の成員は、目立ちやすく、また、数的に劣位におかれている (Taylor, 1981) ため、内集団の評価が下がるのではないかという危機感をもつと考えた。そして、カテゴリー・サイズの小さい集団の成員同士は、お互いが同じカテゴリーに属していると認知する傾向を強めることで社会的アイデンティティを高め、それによって集団を存続させようとすると考えたのである。

Simon & Brown (2000) は、社会的アイデンティティにより同質性効果が生じることを、実験により明らかにした。具体的には、13歳から15歳の学生192名に対してスライドを見せ、そのスライドの色と赤い点の数を判断させた。さらに、学力の高さ、旅費として出せる金額などの集団内での上限と下限の範囲も推測させ、これらを集団成員の判断値に関する同質化認知の指標とした。その結果、多数派である場合よりも少数派である場合の方が、上限と下限の範囲を狭いものとみなし、判断値の分散を小さく推測したのだが、この傾向は、被験者らが外集団としてではなく、内集団の成員という立場にいるときに生起したのである。すなわち、少数派の内集団の成員において、同質性認知の傾向が強いことが明らかになった。これは、内集団が社会的アイデンティティの一部になっていることの影響を示唆したものといえよう。

そこで、社会的アイデンティティ理論に依拠すれば、自分の苗字が少数派、すなわち内集団のカテゴリー・サイズの小さいものは、自分の苗字が多数派、すなわち内集団のカテゴリー・サイズの大きいものよりも、苗字アイデンティティは高くなると仮定できる。これを検討することが本研究の第一の目的である。本研究では、苗字のカテゴリー・サイズは、同姓者数の全国順位によって特定する。また、既存の社会的アイデンティティの測定尺度などを参考に、本研究で新たに苗字アイデンティティの測定尺度を作成する。さらに、全国順位によるカテゴリー・サイズの客観的な指標とともに、主観的指標として、「自分の苗字はめずらしい」と考えている程度もたずね、それと苗字アイデンティティとの関連も検討する。

本研究の第二の目的は、「家族ユニット志向」(土肥, 2003)と苗字のカテゴリー・サイズ, および苗字アイデンティティとの関連性について検討することである。一般的な集団と個人との心理的つながりとしては, 集団成員間の一体感, 所属意識, 同一視, 集団を自己概念に取り込む傾向などが考えられてきたが, 「家族ユニット志向」は, こうした個人と集団との心理的つながりを家族集団だけに限定して考えたものである。というのは, 家族集団は血縁や婚姻を通して成員同士がつながっていることや, より長期にわたって関係が持続するのが一般的であり, したがって, 家族以外の一般的な集団とは異なる, かなり特殊な面も多いと考えたからである。土肥(2003, 2004a)は, 「家族ユニット志向」の下位概念として, 「夫婦役割の固定性」「家族関係の閉鎖性」「イエ意識」を提起し, これらを測定するリカート尺度(各6項目の3つの下位尺度, 計18項目より成る)を開発した。

そこで, 現代においては家族成員同士が同姓であることが一般的であることを踏まえ, 希少な苗字を共有する家族の成員は, 自分が属する少数派の仲間として家族を認知するため, 家族ユニット志向も高いのではないかと考え, これを検討する。さらに, 家族ユニット志向が高い人ほど, 家族成員が共有する, いわば家族の象徴ともなる苗字に対するアイデンティティも強いという仮説についても, 併せて検討する。まとめると, 希少な苗字の人ほど, 家族ユニット志向が高く, また家族ユニット志向が高いことほど苗字アイデンティティも高いかどうかを明らかにする。

＜方法＞

1. 予備調査

本調査で用いる苗字アイデンティティの測定項目を作成するにあたって, 様々なカテゴリー・サイズの苗字の人たちが, 日頃から苗字に関してどのような意識や経験をもっているか, エピソードの形で自由記述させた。また, 質問紙には苗字と出身地も記入させた。調査対象者は, 女子大学生および大学院生27名であり, 2006年7月中に実施した。

2. 本調査

兵庫県内の2つの女子大学の学生211名を対象に、2006年10月、質問紙調査を実施した。質問紙の内容は、以下の通りである。

1) 苗字のカテゴリー・サイズ

まず、客観的な指標として、調査対象者の苗字を記名させ、「苗字館」のホームページで、その苗字の件数の全国順位（3万位まで）¹⁾を検索した。

また主観的な指標として、自分の苗字のめずらしさの判断値を求めた。教示文は「あなたご自身の苗字は、めずらしい苗字だと思いますか。それともありふれていると思いますか。以下のあてはまる数字をひとつだけ選んで、○をしてください。」である。反応形式は、「6.非常にめずらしい 5.かなりめずらしい 4.ややめずらしい 3.ややありふれている 2.かなりありふれている 1.非常にありふれている」の6件法のリカート法である。

2) 苗字アイデンティティ

予備調査の自由記述および文献などを参考に、自分の苗字に対するアイデンティティを測定する尺度項目を作成した。それぞれの項目について、「4.かなりそう思う 3.ややそう思う 2.あまりそうは思わない 1.ほとんどそうは思わない」の4件法のリカート法により評定させた。具体的な項目内容は、Table 1の通りである（予備調査結果に基づき作成された尺度項目には、Table 1の項目以外に、「人から、自分と同じ苗字の人と比べられているような気がする」「自分と同じ苗字の人とは、どこか似ているところがあるように感じる」の2項目も含まれていたが、尺度項目決定過程で、項目通過率を考慮して削除した）。

3) 「家族ユニット志向」尺度(土肥, 2003)

「イエ意識」, 「家族関係の閉鎖性」, 「夫婦役割の固定性」の3下位尺度, 各6項目より成る。それら18項目について、同意する程度を4件法でたずねた。反応形式は、「4.そう思う」「3.どちらかといえばそう思う」「2.どちらかとい

1) (株)日本ソフト販売の「写録宝夢巢」という電話帳ソフトをメインの資料として利用したもの。十数万種類の苗字を用意してこのソフトを使って件数を割り出し、その3年分の件数の平均を算出。さらにそれ以前3年分のデータと(株)エンデバーズの「黒船」というパソコン用電話帳データを使用し、順位を決定している。

えばそう思わない」「1. そう思わない」であった。高得点ほどイエ意識、家族関係の閉鎖性、夫婦役割の固定性が高いことを示す。尺度項目は、Table 2 の通りである。

Table 1 「苗字アイデンティティ」尺度項目の因子負荷パターン

	因子名		
	意識・親近感	同姓への仲間 の愛着感	自分の苗字へ 多数派意識
自分と同じ苗字の人に出会えると、嬉しい	.706	-.219	-.279
自分と同じ苗字の人が身近にいと、その相手を意識してしまう	.703	.044	.159
自分と同じ苗字の人が新聞やテレビに登場すると、得意になる	.654	-.054	.108
自分と同じ苗字の人に対して、運命的なものを感じる	.616	.130	-.068
自分と同じ苗字の地名の場所に親近感をもつ	.603	-.056	.057
自分と同じ苗字の人を、ひいき目にみてしまう	.535	.039	.195
自分の苗字と同じ漢字が含まれる苗字に、親しみを感じる	.533	.139	.049
自分と同じ苗字の友達とは、仲良くなりやすい気がする	.460	.031	-.024
自分と同じ苗字の人とは、同じ先祖ではないかと思う	.407	.165	-.167
自分と同姓同名の人を、インターネットなどで探したことがある	.404	-.234	.168
自分の苗字を人が覚えてくれていると、嬉しい	.350	-.043	-.150
自分の苗字を間違われると、不快である	.280	-.007	-.091
結婚しても、今の苗字を変えたくない(既婚者の場合は、変えなかった)	.003	.770	.097
結婚後も、旧姓を通称として使うつもりである(既婚者の場合は、使っている)	-.034	.742	.082
自分の苗字が好きだ	.024	.512	-.222
自分の苗字の由来を知っている	.005	.320	.240
自分の苗字よりも、名(ファーストネーム)の方が大事である(反転)	.149	-.279	.228
自分の苗字の発祥地を知っている	.148	.220	.135
自分の苗字はありふれていて、損をしているように思う	.019	.008	.633
今までに、親戚以外で同姓の人に出会ったことがない	.091	.049	-.475
同じ苗字の別人と間違われたことがある	.137	.179	.449
自分の家の近所に、同じ苗字の人が多く住んでいる	-.001	.137	.307
自分の苗字が、未来も絶えずにあってほしい	.266	.255	-.293
法事など以外でも、親戚同士が集まる機会がある	.007	.013	-.083

Table 2 「家族ユニット志向」尺度項目の成分負荷パターン

	成分名	
	明確化 家族役割 の	特別視 家族集団 の
夫と妻が、仕事と家庭の役割を時々交替するのは、夫婦の関係を不安定にさせてしまうと思う	.688	-.291
共働き夫婦が、家計や家事の分担方法についてルールを作るのは、他人行儀だと思う	.668	-.193
夫婦それぞれが個人名義の財産を持つことには抵抗がある	.625	.133
同居する子どもは、長男を優先する方がよい夫婦別姓制度に賛成である（反転）	.596	-.085
夫婦別姓制度に賛成である（反転）	.499	.039
長男の嫁は、たとえ別居していても、義理の父母の介護をするのが望ましい	.493	.212
夫婦と子どもが揃っていてこそ、家族である	.416	.350
夫婦が離婚して、どちらか一方の親に育てられた子どもは、かわいそうだ	.314	.271
家庭外でボランティアする余裕があるのなら、家族のために時間や手間を費やす方がよい	.300	.096
家庭で問題が生じてても、家族以外の人の世話になりたくない	.245	.067
一生結婚しない人は、変わり者だと思う	.208	.190
先祖の墓は守り通すのが望ましい	-.145	.646
何代にもわたって土地や家業を継ぐことは、すばらしいことだ	-.112	.642
休日は、夫婦揃って過ごすように心がける方がよい	.067	.595
老親の介護を公的機関に任せるのは、できれば避けたい	-.036	.551
何といっても、最後に頼れるのは血のつながりである	.071	.467
いくら親しい友人でも、家族の代わりにはならないと思う	.027	.407
家族のもめごとは、家族の中で解決するのがよい	.213	.407

4) デモグラフィック変数

家族形態（核家族か、父系の拡大家族か、あるいはそれ以外か）、および現在の住まいに家族（親世代、祖父母世代を含む）が住み始めてからの年数をたずねた。また、居住地が新興住宅地か否かも尋ねた。

<結果>

1. 予備調査の結果

比較的希少な苗字の人の回答として、「今までに親戚以外で同姓の人に会ったことがない」（全国順位 3 万位以降と、23,160位）とか、実家の周りには同姓の人が多いいのに、転居後はほとんど同姓に会わなくなったので偶然出会えると嬉しい(7,237位),「めずらしい名前なので、出身地をきかれる」(9,649位),「苗字だけで国籍がわかる」(1,944位), 苗字が同じもの同士で従兄弟会を定期的に関

いている（7,437位）などがあった。

それとは対照に、比較的多い苗字の人の回答として、「同級生の同姓の友人と自分のどちらが呼ばれているのかわからなくていや」（79位）、「普通すぎて、あまり好きではない。珍しい名前がうらやましい」（68位）、珍しい苗字の子が必ず読み間違えられるのがうらやましい（4位）、多い名前なので、姓と名がそろって初めて自分の名前だと感じる（2位）、同姓の人は多いので親近感は起きないが、名前が同じであると親しみを感じる（114位）などがあった。また、苗字が同一ではなくても同じ漢字が含まれているだけで親しみを感じるというものや、苗字と同じ地名のところに行ってみたいという回答もあった。

これらの自由回答からは、希少な苗字の人ほど同姓に対する親密感をもち、ありふれた苗字のものは自分の苗字をあまり好ましく思っていない傾向が示唆された。

以下は、全て本調査の結果である。

2. デモグラフィック変数

まず、家族形態は、核家族が157名で、祖父母と同居が52名であった。祖父母以外の人との同居は1名のみであった。新興住宅地に住まいがあるものは42名、そうでないものが81名、不明が84名であった。現在の住まいに家族（親世代、祖父母世代を含む）が住み始めてからの年数は、0年から最長100年まで及んでおり、平均年数は21.6年（S.D.=21.02）であった。

3. 「苗字アイデンティティ」の尺度作成

（1）項目通過率の検討 各項目について、「4.かなり当てはまる」「3.やや当てはまる」の回答選択率の合計と、「2.あまり当てはまらない」「1.ほとんど当てはまらない」の回答選択率の合計のバランスを検討した。その結果、「1.人から、自分と同じ苗字の人と比べられているような気がする」は選択肢の1と2で93.8%を占め、「23.自分と同じ苗字の人とは、どこか似ているところがあるように感じる」は選択肢の1と2で94.3%を占めた。これらの2項目は、回答に偏りがありすぎると判断し、予備項目から削除した。

(2) 因子構造の検討 項目通過率で削除されなかった予備項目24項目を、主因子法の因子分析にかけたところ、固有値1.0以上の因子は8個抽出された。スクリー・テストの結果より、3因子構造を仮定するのが妥当であると見当をつけ、因子の解釈のしやすさなどを手がかりに、因子数を3から8の間で探索的に検討した。それらの結果、もっとも解釈しやすい因子数は3であると判断した。プロマックス回転後の因子負荷パターンは、Table 1の通りである。

第Ⅰ因子は、「同姓と会うと嬉しい」「同姓がマスコミに出ると得意になる」などの項目よりなっており、これを「同姓への親近感、仲間意識」と命名した。第Ⅱ因子は、「結婚しても苗字を変えたくない」「自分の苗字が好きだ」などの項目より成っており、これは第Ⅰ因子が同姓の人を対象としたものであることとは対照に、苗字自体への好意を表したものであると考え、「自分の苗字への愛着心」とした。第Ⅲ因子は、「自分の苗字はありふれていて損をしている」「同姓の別人と間違われたことがある」などの項目よりなっており、どちらかといえば自分の苗字に対してあまり好きではないという感情もあるが、多いか少ないかの意識を表したものが中心であると考え、「自分の苗字の多数派意識」と命名した。

そして、それぞれの因子負荷量の高さと尺度項目に採用した場合の α 係数の高さとを考慮して、第Ⅰ因子から10項目、第Ⅱ因子と第Ⅲ因子からそれぞれ4項目を下位尺度項目と決定した (Table 1の因子負荷量がゴシック文字で表された項目を、尺度項目として採用した)。各下位尺度の α 係数は、「同姓への仲間意識・親近感」は $\alpha=.802$ 、「自分の苗字への愛着心」は $\alpha=.632$ 、「自分の苗字の多数派意識」は $\alpha=.515$ であった。また、全ての下位尺度項目を併せて「苗字アイデンティティ」尺度 (18項目) とした場合、 $\alpha=.707$ であった。

各下位尺度の得点は、Table 3に示す通りである。

4. 家族ユニット志向尺度項目の変更

土肥 (2003) の家族ユニット志向尺度の18項目を主成分分析し、スクリー・テストの結果から、従来の3因子構造ではなく、2因子構造を仮定する方が妥当であると判断した。また、従来の下位尺度 (各6項目) の α 係数を算出した

ところ、いずれの下位尺度も α 係数が0.6を下回り、尺度として内的整合性が十分ではなかった。そのため2因子指定の主成分分析をし、プロマックス回転させたところ、Table 2の成分負荷パターンとなった。第Ⅰ主成分は、夫婦の役割分担の取り決めや、子どもや嫁の立場にいるものとしての義務に関する項目が高く負荷したため、これを「家族役割の明確化」と命名した。第Ⅱ主成分は、先祖や血のつながり、介護など、家族ならではの成員同士の特別な絆を重視した項目が高く負荷したため、これを「家族集団の特別視」と命名した。

そして、各成分負荷量の高さと尺度項目に採用した場合の α 係数の高さとを考慮して、第Ⅰ、第Ⅱ主成分ともに、7項目を下位尺度項目と決定した（Table 2の成分負荷量がゴシック文字で表された項目を尺度項目として採用）。各下位尺度の α 係数は、「家族役割の明確化」が $\alpha = .689$ 、「家族集団の特別視」が $\alpha = .626$ であった。また、全ての下位尺度項目を併せて「家族ユニット志向」尺度(14項目)とした場合、 $\alpha = .720$ であった。

各下位尺度の得点は、Table 3に示す通りである。

5. 苗字の全国順位と苗字アイデンティティ、家族ユニット志向との関連

(1) 「苗字館」のホームページで特定した調査対象者の苗字の全国順位のヒストグラムは、Fig. 1の通りとなった。これを正規分布に近づけるためにlog変換を行った（Fig. 2参照）。以下の分析ではlog変換後の順位を用いた（ただし、順位3万位以降の対象者5名については、順位は特定されなかった）。

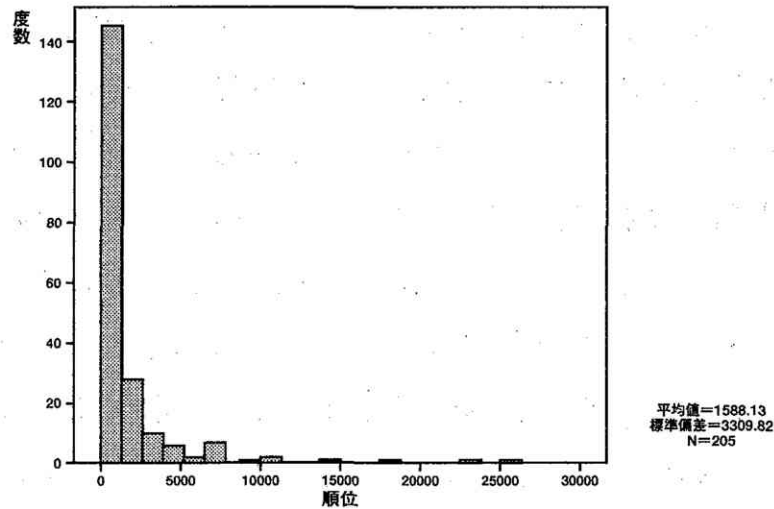


Fig.1 苗字の全国順位のヒストグラム

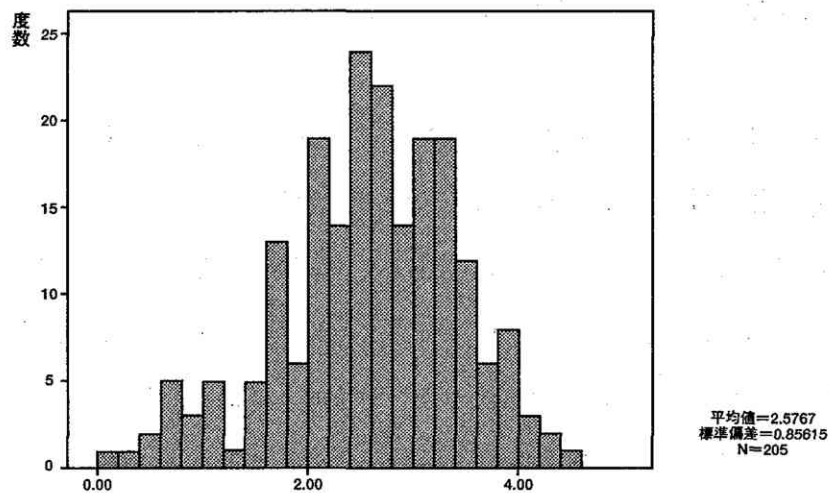


Fig. 2 log変換後の苗字の全国順位のヒストグラム

(2) 苗字順位と苗字アイデンティティの尺度得点間の相関係数を求めたところ、Table 3の通りとなった。主観的な自分の苗字のめずらしさは、客観的に特定された全国順位と非常に高い相関 ($r=.762, p<.01$) を示しており、自分の苗字の多少の認識はかなり正確なものであることがわかった。また、順位が後の方、すなわち希少な苗字の人ほど、「苗字アイデンティティ」の「自分の苗字の多数派意識」は弱まり ($r=-.473, p<.01$)、反対に「同姓への仲間意識・親近感」 ($r=.281, p<.01$; Fig. 3 参照)、および「自分の苗字への愛着心」 ($r=.165, p<.05$) は強まることが分かった。これは仮説を支持するものである。なお、苗字順位が3万位以降の5名の苗字アイデンティティは、「自分の苗字の多数派意識」が $M=5.20$ ($S.D.=1.64$) となり、マン・ホイットニーのU検定の結果、3万位まで

のものよりも有意に低いことがわかった ($U=172.0, p<.05$).

(3) 苗字順位と家族ユニット志向, および苗字アイデンティティの尺度得点間の相関係数も, Table 3 に示された通りである. 相関係数より, 苗字順位と家族ユニット志向の家族集団の特別視と家族役割の明確化のいずれの下位尺度とも関連がなかった. しかし, 家族ユニット志向と苗字アイデンティティにはわずかな関連がみられた. 具体的には, 家族役割の明確化と, 同姓への仲間意識・親近感の間には, 弱い正の相関が見られ, また, 家族役割の明確化と, 自分の苗字への愛着心の間には, 弱い負の相関が見られた. 苗字順位が3万位以降の5名の家族ユニット志向は, マン・ホイットニーのU検定の結果, 3万位までのものとの間に, 有意差は認められなかった.

6. デモグラフィック変数と苗字アイデンティティ, 家族ユニット志向との関連

核家族か祖父母と同居かによるカテゴリー間の平均値の差の検定をしたところ, 苗字アイデンティティの同姓への仲間意識・親近感(平均21.09, S.D.=5.64)の方が祖父母と同居の家族(平均19.56, S.D.=5.43)よりも高い傾向が認められた ($t(199)=1.68, p<.10$). 新興住宅地かどうかによるカテゴリー間の差は, 苗字アイデンティティ, 家族ユニット志向のいずれの下位尺度得点においても有意ではなかった.

Table 3 順位, 苗字アイデンティティ, 家族ユニット志向の尺度得点と相関

	順位 (log 変換後)	め ず ら し さ	意 識 ・ 同 姓 へ の 仲 間 意 識 ・ 親 近 感	自 分 の 苗 字 へ の 愛 着 心	自 分 の 苗 字 の 多 数 派 意 識	明 確 化 家 族 役 割 の	特 別 視 家 族 集 団 の
めずらしさ	** .762						
同姓への仲間意識・親近感	** .281	** .215					
自分の苗字への愛着心	* .165	** .210	** .231				
自分の苗字の多数派意識	** -.473	** -.508	-.033	-.032			
家族役割の明確化	-.043	-.048	* .160	* -.163	-.037		
家族集団の特別視	-.072	-.040	.018	.030	.018	** .335	
全対象者の尺度得点 (S.D.)	2.58 (.86)	3.19 (1.36)	20.72 (5.59)	7.30 (2.28)	8.20 (2.65)	13.97 (3.30)	20.51 (3.17)

** $p<.01$ * $p<.05$

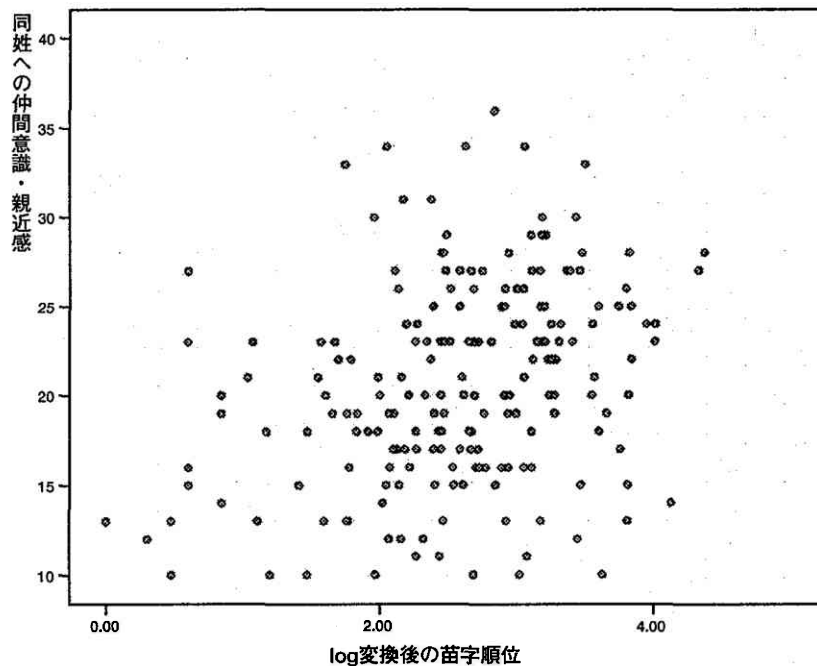


Fig. 3 苗字順位と同姓への仲間意識・親近感との散布図

<考察>

本研究は、苗字を社会的カテゴリーの一種とみなし、個人の苗字に対するアイデンティティの高さは、その個人の苗字のカテゴリー・サイズが小さいほど高くなると考え、これを検討することを第一の目的とした。その結果、苗字の全国順位が後の、希少な苗字のものほど、苗字アイデンティティが高いことがわかった。また、主観的にも自分の苗字がめずらしいと感じるものほど、苗字アイデンティティは高まっていた。この結果は、多数派よりも少数派の内集団の成員の方が、社会的アイデンティティが高いことを支持するものである。これにより、集団成員の同質性認知は、少数派の場合、内集団においても生じる可能性があることが示唆された。カテゴリー化によって同化効果と対比効果が生じ、それがひいてはステレオタイプの形成にもつながっていく（土肥，2004b）ことを踏まえると、ステレオタイプは対象者本人によっても強化されるということになる。

本研究では、苗字という帰属的地位の社会的カテゴリーに対して、アイデンティティを維持しようとすることが確かめられた。したがって、希少な苗字のものにとって、同姓の活躍は我がことのように喜ぶべきものとなるのに対して、

犯罪などの反社会的行動を同姓のものがとった場合などには、アイデンティティが否定的なものとなり、自尊心が傷つき、ひいては外集団成員からの否定的なステレオタイプの形成にもつながりかねないことが考えられる。これと関連して、池上（1997）は、大学生を対象に、自分が入学した大学に対する同一化（愛着と関与の強さ）とステレオタイプの関係を調べた。具体的には、自分の所属大学とその近隣の他大学の特徴や望ましさを評定させた。所属大学は、獲得的地位の一つとして考えられる。研究の結果、意外にも自分の大学を消極的にしか是認しないものが多数を占め、かなり強い内集団卑下の傾向があることがわかった。そして内集団の卑下は、自尊心が低い学生の場合、外集団蔑視の傾向を強めてしまうことが認められたのである。帰属的、獲得的双方の社会的カテゴリーの社会的望ましさとアイデンティティの関係については、今後も検討の必要がある。

本研究では、内集団のカテゴリー・サイズと苗字アイデンティティの関連までしか検討していないため、今後は、苗字アイデンティティが、さらに内集団の成員に対する同質性の認知にまでつながっていくのかを確かめたい。また、内集団同質性認知傾向と、外集団成員に対する同質性認知傾向のいずれが高いのかを比較することにより、集団成員の同質性認知に対する苗字アイデンティティの効果をより明確に把握したい。

ただし、苗字を社会的カテゴリーとみなして、アイデンティティなどとの関わりを研究するためには、検討すべき点が多くある。第一に、苗字の多少についての主観的判断に関わる要因を整理することがある。たとえば、読み方は同じでも、略漢字を使うかどうかや、佳字を当てて他の漢字を使うこともあり、そのような場合、同じ苗字に分類されたものでも、心理的には異なる苗字とみなしている可能性がある。また、共通の漢字が1字でも含まれると、その名前に対して似ているという感じをもつこともあるだろう。ちなみに、苗字でもっともよく使用される漢字は、1位が「田」、2位が「藤」である（丹羽, 2002）。

第二に、苗字自体からくるイメージの良し悪しが、カテゴリー・サイズの大 small とは関係なく苗字アイデンティティに影響することを考慮する必要がある。宮沢（1989）は、自分の名前（姓と名の両方）についてのイメージをSD法によ

る15の形容詞対でたずねた。その結果、「明るい」「新しい」「しゃれた」などの「洗練性」の因子、「深みのある」「安定な」「大きい」などの「量感」の因子、「わかりにくい」「特色のある」「親しみにくい」などの「複雑性」の因子を抽出した。そしてこうした自分の名前のイメージは、使われている文字の言語的意味や、その文字のイメージも関係してくるという。量感のないイメージや複雑性の高いイメージの苗字は、カテゴリー・サイズが大きい割に苗字アイデンティティも高いことが考えられる。

第三に、カテゴリー・サイズがアイデンティティに影響を及ぼす際、そのカテゴリーが使用される状況も考慮されなければならない。たとえば男女のカテゴリー・サイズはほぼ同等であるが、状況によっては男性が多数であったり、女性が多数であったりする。男性が大半を占める職場では、女性は少数派の内集団成員同士ということで、女性であることのアイデンティティが一時的に高まり、同質性認知傾向も高まることなどが考えられる。また、苗字は、その9割が地名に由来するため、特定の地域でのみ多数を占める苗字というものがある。したがって、同姓が近隣に多く在住している場合と、新興住宅地などで生活している場合とでは、カテゴリー・サイズが異なる苗字になったかのような感覚も持つかもしれない。極端な例をあげると、岐阜のある村では85戸中80戸が「岩井」の姓であるという（丹羽、2002）。こうした一村一名の状況では、その村の住民としてのアイデンティティが高くても、岩井の姓自体への苗字アイデンティティは低いであろう。しかし、その岩井さんが、その村から離れた場所に居住した場合などは、苗字に対するアイデンティティが高まるのではないだろうか。

本研究の第二の目的は、希少な苗字の人ほど、個人と家族集団との心理的一体感である家族ユニット志向が高く、また家族ユニット志向が高いほど苗字アイデンティティも高いかどうかを検討することであった。相関分析の結果、苗字の順位と家族ユニット志向との間には関連が認められなかった。また、家族ユニット志向のうち、家族役割の明確化傾向が強いことで、苗字アイデンティティの「同姓への仲間意識・親近感」が高くなる傾向がわずかに見られたが、「自分の苗字への愛着心」については低くなる傾向にあり、一貫した明確な関連

は見出されなかった。

これらの結果から推測されることは、少なくとも本研究の調査対象者である大学生にとって、普段、自分の苗字を意識した時でも、そこから家族を連想することはあまりないということであろう。特に、「家族ユニット志向」は、家族成員同士が協力し合ってお互いの自立を促進する場合の要因として考えられた概念であった。そのため、苗字と関わりのある家族関係の側面は捉えられていなかったのかもしれない。また、本研究の家族ユニットの下位尺度の α 係数はいずれも0.7に満たず、内的整合性が不十分であった。そして、尺度作成当初の因子構造を見出すこともできなかった。今後、家族ユニット志向という構成概念自体の見直しに立ち戻って、より信頼できる尺度に改良していかなければならない。

最後に、本研究は大学生を対象に苗字だけを扱ったが、苗字に名を調査対象に加えることや、結婚後改名した既婚者に対する苗字へのアイデンティティを調べることで、さらに「苗字アイデンティティ」への考察が深まると思われる。たとえば、名前の場合には、名づけた人に愛情を感じていることで自分の名前を好意的に感じることや、名前に込められた親の期待に応えようとする気持ちなども生じる（宮沢, 1989）。あるいは苗字の由来などを知ることが、苗字アイデンティティを変えるのかもしれない。さらに、結婚後の生活への満足感が、結婚で改名した苗字に対するアイデンティティに影響することや、逆に結婚で改名を迫られることが原因で、結婚への意欲が低下してしまうことなども考えられ、現民法の夫婦同姓制に一石を投じることにもなり得る。このように、本研究で取り上げた苗字についてのカテゴリー・サイズ以外の要素も検討することで、より多様な個人への心理的影響を解明できることにもなるであろう。

（本学教授）

<文献>

土肥伊都子 2003 家族成員間協力の規定因に関する実証的検討 - 「家族ユニット志向」概念の提起 - 関西大学経済・政治研究所「研究双書」, 133, 93-123.

- 土肥伊都子 2004a 家族ユニット志向と女性の自立のための家族間協力 - 媒介要因としてのジェンダー・パーソナリティの検討 - 関西大学社会学部紀要, 35, 19-39.
- 土肥伊都子 2004b 「男女の思いこみ」をつくる心のしくみ 青野篤子・森永康子・土肥伊都子 (著) ジェンダーの心理学 (改訂版) ミネルヴァ書房 pp.26-47.
- 池上知子 1997 大学生の社会的アイデンティティと大学ステレオタイプ 日本教育心理学会第39回総会発表論文集, s79.
- 唐沢穰 2005 社会的アイデンティティ 中島義明(編) 新・心理学の基礎知識 有斐閣
- Linville,P.W.,Fischer,G.W.,& Salovey,P. 1989 Perceived distributions of the characteristics of in-group and out-group members: Empirical evidence and a computer simulation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57, 165-188.
- 宮沢秀次 1989 自分の「名前」についての意識 名古屋経済大学・市邨学園短期大学人文科学論集, 43, 293-312.
- Mullen,B. 1991 Group composition, salience, and cognitive representations: The phenomenology of being in a group. *Journal of Experimental Social Psychology*,27, 297-323.
- 苗字館 <http://park14.wakwak.com/~myj/lanking/zenkoku.html>
- 日本の苗字七千傑 <http://www.myj7000.jp-biz.net/index.htm>
- 丹羽基二 (編) 1996 日本苗字大辞典 芳文館
- 丹羽基二 2002 日本人の苗字 - 三〇万姓の調査から見たこと 光文社
- 佐久間英 1972 日本人の姓 六藝書房
- Simon, B. & Brown, R. 1987 Perceived intragroup homogeneity in minority-majority contexts. *Journal of Personality and Social Psychology*, 53, 703-711.
- Simon, B. & Brown, R. 2000 Perceived intragroup homogeneity in minority -majority contexts. In Stangor ,C.(Ed.) *Stereotypes and prejudice*. NY: Psychology Press, pp.326-337.
- Tajfel, H. & Turner, J. C. 1979 An integrative theory of intergroup conflict. In W.G.Austin & S.Worchel (Eds.) , *The social psychology of intergroup relations*. Monterey, CA:Brooks/Cole.